

# Talking Beasts のジレンマ —— 〈ナルニア国ものがたり〉 について ——

菱 田 信 彦\*

## Talking Beasts' Dilemma A Study of "The Chronicles of Narnia"

Nobuhiko HISHIDA

### 要 旨

C・S・ルイスによる「ナルニア国ものがたり」は、19世紀から20世紀中ごろにかけてのイギリス帝国の活動をめぐる様々な言説を反映している。それはとくに「ものいうけもの」と「ものいわぬけもの」の関係に明示されている。「ものいうけもの」が人格をもつ存在として扱われる一方で、「ものいわぬけもの」は殺され、食われる。このようなイメージは、まず、食べてよい動物と食べてはいけない動物を明確に分けるキリスト教的動物観の反映としてとらえることができる。また、「ものいうけもの」が抱く、自分がいつか理性を失って「ものいわぬけもの」になってしまうのではないかという不安は、この時代に大きな影響力をもった、人間の退化の可能性をめぐる言説と関わりがあると考えられる。少数の白人が支配するナルニアが帝国植民地のイメージをもつとすれば、口をきく「ものいうけもの」たちは、英語を教えられた一部の先住民とみなすことができる。彼らが抱く「退化」への不安は、実は、先住民との接触が自分たちの「退化」を引き起こすかもしれないという白人植民者の不安の投影ではないか。さらに、「ものいわぬけもの」だけを殺すというルールは、帝国の支配を受け入れた一部の先住民のみを「人格をもつ存在」として扱うことにより、他からの取奪を正統化する姿勢に通ずるように思われる。ナルニアの「ものいうけもの」の描写は、イギリス帝国の植民地状況をめぐる複雑な他者表象の反映として解釈しうる。

キーワード：C・S・ルイス、ナルニア国ものがたり、イギリス帝国、植民地、他者表象

---

\*教授 英文学

## はじめに

本論では、2009年5月16日に開かれた「日本イギリス児童文学会 東日本支部春の例会」における口頭発表をもとに、19世紀半ばから20世紀中ごろまでにかけてのイギリス帝国の活動にまつわるさまざまな他者表象の言説が、C・S・ルイス（C. S. Lewis, 1898–1963）による「ナルニア国ものがたり」（“The Chronicles of Narnia,” 1950–56）にいかん反映しているかを分析する。作品としては、『カスピアン王子のつのおえ』（*Prince Caspian*, 1951）を中心とし、他の作品にも言及しつつ論を進めていく。

「ナルニア国ものがたり」の第二巻、『カスピアン王子のつのおえ』において、ペベンシー家の子どもたちは、カスピアン王子のもとへ急ぐ途中、熊に襲われる。同行していた小人のトランプキンが矢を放って熊を倒すが、そのときその熊が“a talking bear”，つまり言葉をしゃべる熊であったかどうか問題となる。ペベンシー家の長女スーザンとトランプキンのその場面でのやりとりを次に引用する。

「わたし、わたしは立ちおくれたわ。」とスーザンが、どぎまぎした調子でいきました。「これが、わたしたちの味方のクマ、話のできるクマじゃないかと、思ったもんだから。」スーザンは、殺すことが、いやだったのです。

「そこがやっかいのたねなんです。」とトランプキンがいきました。「けものたちの大部分が敵がわについて、口がきけなくなっても、それでもまだ、敵地にそうでないけものも残っているのですからね。どっちだかわかりませんし、それに、わかるまで待ってるわけにもいきませんからね。」<sup>1</sup>

ナルニアには、理性をそなえ、言語をあやつる「ものいうけもの」（Talking Beasts）と、通常の動物と変わらない「ものいわぬけもの」（Dumb Beasts）の二種類が存在する。このトランプキンの言葉から、まずこの二種類が外見上はほとんど区別できないこと、そして、「ものいうけもの」が理性と言葉を失って「ものいわぬけもの」になってしまうこともあることがわかる。これを聞いて、ペベンシー家の末っ子、ルーシィは次のように思い悩む。

ふたりが、はなれたところに腰をおろすと、ルーシィがいきました。「わたし、すごくおそろしい考えが、頭に浮かんできちゃったのよ、スー。」

「なんなの？」

「もし、いつか、わたしたちのあの世界でよ、人間の心のなかがすんでいって、あのクマのようになって、うわべが人間のままでいたら、そしたら、ほんとの人間か、けもの人間か、区別がつかないでしょ？」(127-8)

最終巻『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956)で、「ものいうけもの」が「ものいわぬけもの」になるというできごとが実際に起こる場面がある。それはアスランを信じない猫のハジカミが、他の生き物たちをだまそうとしてカロールメン兵が待ち伏せする既に歩み入ったあと、口をきけなくなって普通の猫になってしまうという場面である。これを見た他の「ものいうけもの」たちは、恐慌状態になって猿のヨコシマがあやつるにせのアスランに慈悲を求める。ナルニアにおける「ものいうけもの」は、「ものいわぬけもの」から明確に弁別されているようでありながら、その弁別が失われることへの不安にたえずさらされた存在として描かれていることがわかる。

熊を倒したトランプキンとベベンシー家の子どもたちは、その後、熊を解体して食料として担いでいく。ここからわかるもう一つのこと、は、「ものいわぬけもの」であれば食べていいということである。ほとんどあらゆる種類の動物が言葉を話して人間と同じように暮らしている世界でありながら、「ナルニア国ものがたり」では肉食そのものが否定的に描かれることはけっしてない。多くの食事場面において肉料理が言及されるし、アスラン自身が催す宴会においても、ローストした肉やハト料理などが供される。しかしその一方で、「ものいうけもの」を食べることは、ナルニアに暮らすすべての者にとって絶対的なタブーである。そのことは、『銀のいす』(*The Silver Chair*, 1953)において、巨人族の都で出された「ものいう鹿」の肉を知らずに食べてしまった沼人の泥足にがえもんが、それを知ったときの反応のしかたによく表れている。

ところが、ナルニア生まれの泥足にがえもんは、気分がわるくなり、気が遠くなって、まるでわたしたちが赤ちゃんをたべてしまったと気がついた時のようなぐあいになりました。

「あたしらは、アスランのおいかりをまねいてしまった。」とにがえもん。「これはみな、あのしるべのことばを守らなかったからおこったのです。あたしらは、きつとろいがかけられたのでしょうか。ゆるされるものなら、このナイフでひと思いにあたしらの胸をつきさすのが、いちばんいいんです。」<sup>2</sup>

さらに、「ものいうけもの」を使役することもタブーとなっている。『馬と少年』(*The Horse and His Boy*, 1954)で、カロールメン出身のコルとアラビスは、ナルニアやアーケン国では通常の場合、「ものいう馬」に乗る人は誰もいないのだということを知る。また『さいごの戦い』において、チリアン王と一角獣のたから石がカロールメン人を殺したのは、彼らがナルニアの「ものいう馬」を無理やり働かせていたことを知ったときだった。その一方、『馬と少年』で言及されているように、戦争などの非常時に「ものいう馬」が人間を乗せるのは普通のことであるようだ。要するに「ものいうけもの」を、本人の意思に反する奴隷労働に従事させるのがタブーであるということなのだろう。

ルイスはなぜ、ナルニアの動物たちをこのような存在として描いたのだろうか。外見はほとんど同じであるにもかかわらず、「ものいうけもの」であれば人格のある存在として尊重され、「ものいわぬけもの」であれば殺され、食われ、強制的に働かされる。さらに両者を分かつ境界はまことにあいまいなもので、「ものいうけもの」はつねに自分がいつ「ものいわぬけもの」に身を落とすかしないという不安の中に生きている。先ほどの引用部分で、ルーシィがナルニアの動物のこのような状況を自分たちの世界の人間たちにあてはめていることから考えても、ルイスがこれを現実社会のアレゴリーとして描いていることは明らかである。そして、第二作の『カスピアン王子のつのおえ』で早くもルーシィにこのような台詞を言わせていることは、これが「ナルニア国ものがたり」を通してルイスが表現したかった主要なことがらの一つであることを思わせる。

最初の引用部分でスーザンが「ものいうクマ」を「わたしたちの味方のクマ」と呼んでいるが、これは原文では“one of our kind of bears”である。ここにこの問題を考える手がかりの一つがある。マーク・シェルは、『地球の子どもたち』において、動物を自分と同じ種族 (kind) であるとみなす考えはキリスト教文化に広くみられるものだと論じている。やや長くなるが、次に引用する。

また、すべての生きている被造物が普遍的親族関係にあるという考えは、世俗的キリスト教文化では一般的なものになっている。たとえば、広く流布したひと昔前のイングランドのクリスマス・キャロル——外種的 (extraspecies) な神が内種的 (intraspecies) な人間として誕生したことを祝う歌——は、次のようなりフレインを含んでいる。

友好的な獣たちが彼のまわりに立っていた。

「イエス、親切 (kind) で善良なるわれらのきょうだいよ」

このキャロルを歌うとき、人間、つまりわれわれが話をする動物と定義する種で構成される聖歌隊メンバーは、話をする家畜（ヤギ・ニワトリ・ヒツジなど）の聖歌隊メンバーであるふりをする——それはまるで、歌い祝う人間が、動物でもあるかのようであり、また動物が、歌い祝う人間でもあるかのようである。人に対して動物が友情と親切心と兄弟愛を抱いているという考えは、当然喜ばしい。しかしこの考え方は、同時に、かなり人に動揺を与える可能性もある。たとえば、普遍的親族関係は、肉食をすべてカニバリズムであることにしてしまう。それは、近親相姦的カニバリズムにすらなってしまうのである。なぜなら、肉食者がむさぼり喰う肉は、「きょうだい」の身体のもの、つまり本質的には人間である自分の家族、あるいは、もしこう言うほうがよければ、自分の超種（superspecies）家族のメンバーが、屠殺されたことで得られたものに違いないからだ。<sup>3</sup>

このようにシェルは、キリスト教が自らの普遍性をアピールし、神の法があらゆる存在にまねく適用されることを主張するために、動物が人間と同じ種族であり、きょうだいであるというレトリックを展開したことを論じている。その際使われたのが、上の引用部分に紹介されているように、身近な動物たちが「人間」として口をきき、自らの言葉で神をたたえるイメージだった。

その一方、キリスト教は肉食者の宗教である。キリスト教徒の立場からすれば、自分たちのきょうだいとしての動物のイメージは保ちながらも、自分たちが動物の肉を食べることは正当化されねばならない。そのために採用されたレトリックが、シェルによれば、「動物はすべて人間のきょうだいである」というかわりに、「人間のきょうだいであるものだけが動物である」とする論理なのである。

すべての神の被造物は、聖歌隊に席を持つだけでなく、また、その聖歌隊の同一種の場に住んでいるとする見解は、文字どおりの意味で全体主義的である。そして、この見解は多様な動物それぞれに固有の場所を与えることはないので、それらを人間の地位にではなく、単なる「物」——つまり、単に食べるための物——の地位に追いやってしまうことがよくある。（「すべての動物はわれわれの親族だ」というかわりに、われわれは「われわれの親族だけが動物であり、私が食べるものは単なる物だ」というようになる。）（165）

スーザンが「ものいうクマ」を“one of our kind of bears”と呼び、そう呼ばれないクマは食べてもかまわないとすることは、一部の生き物だけを自分たちの“親族”としての動物とみて

食べることを禁じ、それ以外の生き物はその範疇を外れた単なる“もの”であるから食べてもよいと考えるキリスト教の動物観にぴったりと当てはまる。ナルニアにおける「ものいうけもの」と「ものいわぬけもの」のヒエラルキーは、キリスト教社会が動物を自分たちの“親族”であると主張しつつ、それを逆に動物支配を正当化するレトリックに転化してきたプロセスをあざやかに反映している。

では、ルーシの不安、つまりナルニアの「ものいうけもの」が「ものいわぬけもの」に転落してしまうように、われわれの世界の人間が、外見は人間らしさを保ったまま、内面においては人間ではなくなってしまうかもしれないという不安はいったいどのように解釈すべきなのか。ヴァージニア・ツインマーマンは、『ヴィクトリア人の発掘』において、19世紀のイギリス人が「退化して動物に戻ってしまう」ことへの不安を抱えていたことについて論じている。

植民地が拡大し、いわゆる未開人に接する機会がふえたことは、人類がより低い段階で存在するという見解を裏づけるものとなったようである。マクリントックは、労働者階級や女性が「先祖返り」、すなわち未開で退化した存在とみなされたイングランドに、この見解が適用されたと論じている。テニソンは「60年後のロックスレイ館」で退化（degeneration）という主題を明示的に扱っている。「進化は理想的な善を求めて高みへ向かい／回帰が進化を泥沼へと引きずりおろす」（197-98）と。彼は同じ詩のもっと前の方で、人間の運命についてさらに率直な言い方をしている。彼は問う、「われわれが獣の中から浮かび上がってきたのなら、また獣に戻ることになるのか？」<sup>4</sup>

このテニソンの問いかけは原文では“Have we risen from out the beast, then back into the beast again?”だが、これは『魔術師のおい』（*The Magician's Nephew*, 1955）において、初めて「ものいうけもの」たちを生み出したアスランが、彼らに対して述べるいましめの言葉と基本的に一致している。原文で引用する。

The Dumb Beasts whom I have not chosen are yours also. Treat them gently and cherish them but do not go back to their ways lest you cease to be Talking Beasts. For out of them you were taken and into them you can return. Do not so.<sup>5</sup>

19世紀のイギリス人が直面していた問題が、ナルニアにおいては、その創造の瞬間にすでに予感されていたわけである。このように、「ものいわぬけもの」に戻ってしまうかもしれない

という「ものいうけもの」たちの不安は、ルーシーが表明する懸念を通して、当時のイギリス人が抱いていた「退化」、すなわち“degeneration”に対する不安の投影として解釈できるようになる。

この“degeneration”は、19世紀半ばから20世紀半ばのヨーロッパにおいて、社会的、文化的に大きな影響力をもった概念である。ダーウィンの「進化論」に端を発するこの概念は、進化はその帰結として必然的に退化をとめない、人類もいつとは知れぬ未来において、より環境に適応した他の種にとって代わられるであろうと考えるものだった。重要なことは、19世紀のイギリス中産階級社会において、この“degeneration”が国内の労働者階級や植民地の先住民との接触によってもたらされるという観念が存在したことである。人類の発達段階においてより“低い”段階にとどまっているそれらの人々との接触が、一種の“感染”を引き起こし、高度な発達段階にある中産階級の白人を低い段階に引きずりおろすのではないかという不安は、20世紀においても力を持ちつづける。そしてそれは、先住民のみならず、白人である植民者をも“degeneration”を引き起こす要因として危険視する傾向へとつながっていく。この問題に関して、アン・ローラ・ストローラーは『性的知と帝国の力』で次のように論じている。

20世紀初期にみられる帝国主義思想の変化は、被植民者の“他者性”のみならず、植民者自身の“他者性”に注目するようになった。フランスでは医学や社会学の論文が、植民地は明らかに退廃的な社会類型であるとし、それは心理学的に同定可能であり、身体的特徴によって判別できると指摘した。(166) (中略) 植民地に「あまりに長く」留まった人々は広範囲にわたる疾病にさらされ、それは過労で体を壊すことから個人的、人種的退廃までさまざまだった。しかし、もっとも深刻な結果をもたらすのは文化的な感染だった。なぜならそれは、上に立つ者が守るべきしきたりをないがしろにし、そのしきたりとはいかなるものかについて異論をとなえるということを引き起こしたからだ。ヨーロッパ人の目から見て墮落した植民者たちの独特の特質としてあげられるもの——「見栄っ張り」、「頭でっかち」、「怠惰」、そして多くの場合「道徳観念の低下」だが——は、先住民の文化の影響による「欠点」であり、植民者を被植民者と同程度に非文明的にしてしまうのである。<sup>6</sup>

ここには、イギリス帝国が終焉を迎えつつあった20世紀初頭にあって、植民地がもたらす“degeneration”の危険が声高に語られていたこと、そして、植民地の先住民だけではなく、植民地に暮らす白人植民者もまた、本国に“degeneration”をもたらすおそれのある存在とし

て「他者化」されていたことが論じられている。気候や病気の影響もさることながら、最も深刻なのは文化的退廃だった。先住民の文化に接触しすぎた白人植民者は、無気力や道徳観念の欠如といった傾向を示すようになり、先住民と同じく“未開の”状態に陥ると考えられたのである。

植民者と先住民の区分があいまいになることへのこの不安を、『カスピアン王子のつのおえ』に見ることができる。ナルニアが植民地のイメージを帯びていることはすでにたびたび指摘されているが<sup>7</sup>、その場合「ものいうけもの」たちは先住民の立場にあてはまるとされる。そのことは例えば、アナグマの松露とりが述べる言葉によく示されている。松露とりとトランプキンの会話を次に引用する。

わたしたちのところにおられるのは、ナルニアのまことの王だ。まことの王が、まことのナルニアにもどられるのだ。小人たちが忘れようが、わたしたちけものはみんな、おぼえてるぞ。ナルニアは、アダムのむすこが王さまにならないかぎり、うまくいかないのだ。」

「びっくり、しゃっくり！」とトランプキンがいました。「まさか、おまえさんは、人間にこの国をやろうというのじゃあるまいね？」

「そんなことはいわない。」アナグマがこたえました。「これは、人間の国ではない（それをわたしよりよく知っているものがあるか）。だが、人間が王たるべき国だ。（71-2）

松露とりの言葉によれば、「ものいうけもの」たちは、ナルニアの本来の住人であるにもかかわらず、自分たちを統治する能力がないことになる。ナルニア国において政治がうまく機能するのは、ペベンシー家の子どもたちなど、本来この国に属さないはずのイギリス白人が統治にあたる場合のみなのである。カスピアンにしても、テルマール人の祖先となった海賊がイギリス軍艦バウンティ号の反乱者をモデルにしているとの説に従うならば、イギリス系の植民者の子孫であるということになる<sup>8</sup>。

では、なぜカスピアン<sup>9</sup>の叔父であるミラースや、父カスピアン9世の統治下では、ナルニアはうまくいっていなかったのだろうか。先ほどのストーリーからの引用に述べられていたように、植民地で過ごす年月が長いほど、植民者にとって自分たちを先住民と弁別することは難しくなる。コルネリウス博士やカスピアン<sup>10</sup>の乳母の場合のように、先住民との混血も進む。テルマール人たちがナルニア先住民を徹底的に排斥し、その存在さえ否定しようとしたのは、先住民と接触することによって自分たちが彼らと同化し、植民者としてのアイデンティティを失っていくことへの不安の表れでもあるのだろう。植民地に生まれ育った植民者、いわば「クレ

オール」であるカスピアンがそのあいまいな立場を克服し、真の王となるためには、イギリス“本国”から直接ナルニアに来たピーターたちと、神であるアスランによって、その正統性が保証され、彼が一段高い立場に引き上げられることが必要なのである。戴冠に先立ち、アスランの命によってピーターがカスピアンに騎士の位を授ける場面が、このことを端的に示している。

ここまで見てきたように、ナルニアの「ものいうけもの」たちが抱く、「ものいわぬけもの」へ退化してしまうかもしれない、という不安は、多層的な意味を帯びている。それはまず、植民者との出会いによってヨーロッパ的な文化や価値観を内面化し、自分を同族の人々から弁別するようになった先住民が抱くであろう不安である。しかし、「ものいうけもの」とテルマール人の両者がナルニアにおいて不安定であいまいな立場を共有しているのを見ると、われわれはそれが先住民と接触する植民者の不安でもあることに気づく。さらにルーシイが口にする懸念を通して、その不安は、先住民のみならず植民者をも他者として扱い、ともに“degeneration”をもたらし存在として排斥しようとする本国人の視線の中にとりこまれていく。「ものいうけもの」たちは、さまざまな立場の者たちが出会う植民地的状況において、重層的に行われる他者化のプロセスの中で生ずる不安や葛藤をあまさずからめとるモチーフとして、「ナルニア国ものがたり」の植民地表象において大きな役割をはたしている。

ここで「ものいうけもの」たちが「口をきく」ということについてもう少し考えてみたい。彼らは他の多くの動物たちから選ばれて人格を与えられたわけだが、その主要な特質は口がきけるといふこと、別の言い方をすれば英語をしゃべるといふことである。このこともまた植民地的状況において重要な意味を持つ。イギリス帝国が植民地の先住民を従わせる上で主要な武器となったのが、先住民の教育、とくに英語教育を施すことだった。イシュマエル・タリブは『ポストコロニアル文学の言語』でこの問題について次のように論じている。

英語は帝国の支配と統制を確実にする有力な手段とみなされてきた。ポーライナ・アルベルト（1997）は、たとえば、「英国が新大陸の支配権を先住民と争うにあたって最も強力な戦略となったのは、標準英語だった」と主張している。それを示す典型的な例が、英国の文献学者ウィリアム・P・ラッセルが1801年に著した信条である。ラッセルは次のように論じている。

もしアフリカやアジアの各地に多くの学校が設立され、まったく無料で先住民に教育をほどこし、とくに優秀な生徒にはイギリス工業が生み出すさまざまなほうびの品を

与えたとすれば、イギリス人にとって、彼らの商品、見解、宗教が受け入れられるように準備をととのえるための最良の方策となるだろう。これは心をつかみ、愛情を得ることによる征服であり、剣と大砲によって達成される征服よりもはるかに効率的だ。教員、教科書、そしてほうびの品に費やされる千ポンドは、野蛮人の国を屈服させるために、砲兵、弾丸、弾薬に費やされる四万ポンドよりも多くのことをなしとげるだろう。(バイリー (1991) による引用：106-7)

このように、先住民に英語で教育をほどこすことは、彼らの文明化という事業に貢献したのみならず、おそらくさらに重要なことに、彼らをより効率的に支配するという帝國的事業に貢献したのである<sup>9</sup>。

ここに紹介されているラッセルの主張は、例としてはやや古いが、植民地支配において教育、とくに英語教育の効用がいかに重視されたかを示している。多くの先住民の中に、英語を話し、キリスト教を信じ、イギリス的な価値観や生活習慣を身につけた少数のエリート層を作り出すこと。そのエリート層が自分たち以外の「英語を話さない」先住民との断絶を意識し、旧来の価値観や生活習慣に戻っていくのを恐れるように仕向けること。それはイギリスの植民者にとって、植民地経営を容易にするだけでなく、彼らの中に根深く存在する、自分たちの方が先住民の文化に染まってしまうのではないか、という恐怖を遠ざけるための方策でもあった。そしてこのように選ばれた少数の層だけが、「ものいう先住民」として、人格を付与された存在として扱われたであろうことは想像に難くない。

カスピアンにテルマール人の来歴について話をしたとき、アスランは彼に次のように言葉をかけている。これも原文で引用する。

“You come of the Lord Adam and the Lady Eve,” said Aslan. “And that is both honor enough to erect the head of the poorest beggar, and shame enough to bow the shoulders of the greatest emperor on earth. Be content.” (233)

ここに示されているとおり、キリスト教は基本的に、神の前では立場が違ってもすべての人間はきょうだいであり、平等である、という思想をもっている。しかし、アフリカやアジア、アメリカの植民地を経営しようとするキリスト教徒たちは、当然ながら、先住民を武力で支配し、彼らから収奪することを正当化する必要に迫られる。そのとき用いられたのが、マーク・シェ

ルが食べてもいい動物について論じたことと同様のレトリックのすり替えである。すなわち、「すべての人間はわれわれのきょうだいである」ではなく、「われわれのきょうだいである者だけが人間である」とするもので、さらに、「それ以外の者は人間ではなく、単に“もの”であり、神の法の埒外におかれる」という意味を含ませるものだった。そして「われわれのきょうだい」であるための条件の一つは、おそらく、シェルが言及している聖歌隊の“動物”たちと同様、英語を話し、その言葉で神をたたえることができる、というものだっただろう。

「ものいうけもの」と「ものいわぬけもの」は、外見はほとんど同じでありながら、一方は人格を持つ者として尊重され、もう一方は殺され、食われ、利用される。それと同じように、キリスト教徒の植民者は、外見がまったく同じ先住民の間に、人間である者とそうでない者との区別を形成せざるをえなかった。そして、そのことが、植民者である彼ら自身もまた、外見は変わらぬままに、いつしか人間性を失い、「人間でないもの」に身を落としていくのではないかという不安をかき立てることになる。「ナルニア国ものがたり」における「ものいうけもの」と「ものいわぬけもの」との緊張関係は、19世紀中ごろから20世紀中ごろまでのイギリス人が、さまざまなレベルで「植民地的他者」を設定するうちに、自分自身が「他者化」されることへの不安にたえずさいなまれるようになっていく状況をみごとにすくい上げている。

## まとめ

「ナルニア国ものがたり」がイギリスの植民地活動にまつわるさまざまな言説を反映していることは疑いない。しかし、この作品が発表されたのは第二次世界大戦が終わってすでに数年たってからのことである。なぜルイスは、この時期に発表したファンタジー作品の舞台を、植民地のイメージを色濃く漂わせる世界に設定したのだろうか。

『カスピアン王子のつるぶえ』が発表された1951年の10月、ウィンストン・チャーチル率いる保守党は総選挙に勝利して政権に復帰した。戦後の経済危機の中、クレメント・アトリー（Clement Attlee, 1883-1967）の労働党が実施した緊縮財政に人々は閉塞感をつのらせ、また彼の在任中、1947年にインドが独立を果たして、帝国の喪失は決定的なものとなった。人々は、過去の「強いイギリス」を想起させるチャーチルを支持したのである。チャーチル自身も、「連邦（Commonwealth）」という名称よりも、戦前の「帝国（Empire）」という名称を好んで用いた<sup>10</sup>。ルイスが『ライオンと魔女』（*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950）の執筆に本腰を入れたのは1948年のことであり、1951年3月には『銀のいす』を脱稿して、最後の2作を除くシリーズ5作を完成させていたという<sup>11</sup>。つまり、「ナルニア国ものがたり」の大半が、

インドが独立してからチャーチルが首相に再任されるまでの数年間に書かれたことになる。

この喪失感が深まる時代にあって、自分の信じるキリスト教道徳が実現される理想的な世界をルイスが思い描いたとき、それが過去の“秩序ある”世界、すなわち「人間であるもの」と、さまざまな意味で「人間でないもの」とが明確に弁別されている世界のイメージをとったことは驚くにあたらない。しかし、それは同時に、「人間であるもの」が「人間でないもの」に浸食されていき、「人間らしさ」を失っていくことへの不安を浮かび上がらせずにはいない。テルマール人という植民者の侵入によって混沌をきわめたナルニアにおいて、自らの信念のみをよりどころに立ちあがり、正統の王たる資格を得て、植民者と先住民を統合して新たな秩序を築いたカスピアンは、おそらくルイスにとってこのシリーズの真のヒーローだったのだろう。それで、カスピアンが3つもの作品で主要な登場人物となっていることの説明がつく。

「ナルニア国ものがたり」シリーズは、第二次世界大戦直後の喪失感漂うイギリスにおいて、伝統的な秩序への憧憬を抱きつつ、新たな秩序のあるべき姿を示そうと苦闘したルイスの心情をあらわす作品なのではないだろうか。

## 注

- 1 Lewis, C. S. *Prince Caspian*. 1951. New York: HarperCollins, 1979, p.127. 和訳は『カスピアン王子のつるぶえ』（瀬田貞二訳、東京：評論社、1972）に従う。これ以降の引用については個々に頁数を示す。
- 2 ———. *The Silver Chair*. 1953. New York: HarperCollins, 1981, p.132. 和訳は『銀のいす』（瀬田貞二訳、東京：評論社、1972）に従う。
- 3 Shell, Marc. *Children of the Earth: Literature, Politics and Nationhood*. Oxford: OUP, 1993, pp.164-5. 和訳に際して『地球の子供たち：人間はみな「きょうだい」か？』（荒木正純、村山敏勝、橋垂紗美共訳、東京：みすず書房、2002年）を参照した。これ以降の引用については個々に頁数を示す。
- 4 Zimmerman, Virginia. *Excavating Victorians*. Albany: State U of New York P, 2007, p.137. 拙訳による。
- 5 Lewis, C. S. *The Magician's Nephew*. 1955. New York: HarperCollins, 1983, p.140.
- 6 Stoler, Ann Laura. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: U of California P, 2002, p.66. 拙訳による。
- 7 Dobrin, Sidney I. and Kenneth B. Kidd, eds. *Wild Things: Children's Culture and Ecocriticism*. Detroit: Wayne State UP, 2004, p.117. など。
- 8 瀬田貞二は『ライオンと魔女』（瀬田貞二訳、東京：岩波書店、1966年）のあとがきでこの説を紹介している。
- 9 Talib, Ismail S. *The Language of Postcolonial Literatures: an Introduction*. London: Routledge, 2002, pp.8-9. 拙訳による。
- 10 ブリッグズ、エイザ『イングランド社会史』（今井宏、中野春夫、中野香織訳、東京：筑摩書房、2004年）p.433.

Talking Beasts のジレンマ——〈ナルニア国ものがたり〉について

- 11 マイケル・ホワイト 『ナルニア国の父 C・S・ルイス』(中村妙子訳, 東京: 岩波書店, 2005年) pp. 186-7.